

会 議 録

会議名	平成24年度第1回 八王子市市史編集委員会	
日 時	平成24年7月13日（金）午前10時00分～午前12時00分	
場 所	八王子駅南口総合事務所会議室	
出席者氏名	委員	藤田 覚委員長、新井勝紘副委員長、相原悦夫委員、畔上能力委員、池上裕子委員、関 和彦委員、松尾正人委員、光石知恵子委員
	説明者	木内基容子市史編さん室長、齋藤和仁市史編さん室主幹
	事務局	（説明者のほか）長谷部晃一市史編さん室主査、渡部恵一市史編さん室主任、春日祐美市史編さん専門員
欠席者氏名	小川直之委員、前田成東委員	
議 題	【議題】 1．平成23年度編集・刊行過程での主な課題及びその検証について 2．平成24年度刊行予定について 3．市政モニターへの設問項目について 4．その他	
公開・非公開の別	公開	
傍聴人の数	なし	
配付資料名	八王子市市史編集委員会委員名簿 議事次第 資料1 平成24年度市史編さん事業の組織体制（平成24年7月現在） 資料2 平成23年度編集・刊行過程での主な課題及びその検証 資料3 刊行物販売実績・無償配付先・掲載記事一覧 資料4 市史編集専門部会調査活動報告 資料5 平成24年度編集・刊行スケジュール 資料6 「資料編1 原始・古代」及び「資料編3 近世1」の章立て・目次案 資料7 市史研究第3号割付表 資料8 市政モニターへの設問の基本的考え方及び設問項目 資料9 「広報はちおうじ8月1日号」における特集記事 " 市史編集職員研修の開催 " 刊行物読者アンケートはがきの作成 " 調査等協力者に対するお礼の品の作成 " 市民講座の開催 " いちょう塾への講座提供	

会議の内容

1. 開会

【藤田委員長】本年度第1回目の市史編集委員会を始める。前田委員、小川委員の2名が欠席、畔上委員が遅れるということで、委員会としては成立している。

【木内室長】今年度第1回目ということで、一言あいさつさせていただく。昨年度は各部会とも活発に活動いただき、また審議会でも計画の一部変更の議論をいただき、一定の方向が出て無事に終了することができた。『新八王子市史』全14巻の1巻目も無事に刊行した。皆様方のご協力ご指導のおかげで、本当に感謝している。事務局の不行き届きでうまくいかなかった部分も各部会の先生方に相当にご尽力いただき、本当にありがたく思っている。

19年度からスタートした10年間にわたる市史編さん事業も丸5年が経過し、後半戦に入る時期になった。また引き続きご協力をお願いしたい。

既に文書で案内したが、4月1日付で4年間主幹を務めた新井が学習支援課長に転出し、後任としてこども科学館から齋藤が着任したのであいさつする。

【齋藤主幹】4月1日付でこども科学館館長から転入した齋藤和仁と申します。どうぞよろしく申し上げます。着任して3か月たち、ほとんどの皆様方には既にいろいろお願い事をし、ご協力いただき本当にありがとうございます。引き続きよろしく申し上げます。

【藤田委員長】それでは、議題に入る。今日の議事録の署名は、新井委員にお願いする。

2. 平成23年度編集・刊行過程での主な課題及びその検証について

【藤田委員長】最初に、1の前年度の編集・刊行過程での主な課題及びその検証について。

【齋藤主幹】室の体制が変わったので説明する。資料1、特に変更のあった部分としては、下段の市史編さん室の職員だが、4月1日付で主査職を1名、編集担当職員を1名の計2名を増員した。この体制で、今後、本格的な刊行に向けて執務をしていく。

続いて資料2、平成23年度編集・刊行過程での主な課題及びその検証である。一覧表にしたが、これまでの編集委員会で報告していなかったこと、また「近現代1」が刊行されたので「近現代1」で出てきた課題を中心に説明したい。

課題の特に1、2、3と6、まず共通事項として、事務局で筆耕要項、事前の統一的な表記基準、凡例といったものがきちんと定まらないうちに、作業が同時進行でスタートしてしまったために起こった問題である。まず、資料について、筆耕者の判断で一定程度省略もあり得るのか、あるいは原典どおりで載せるのかという問題とか、掲載の際の体裁、それから表記の揺れ等についても、事前にきちんとした統一基準がなかった。凡例の作成が同時進行になってしまった等、問題、課題が発生した。4は技術的な問題とも絡むが、ワードからIn Designの入稿用最終原稿に移行するタイミングが早過ぎたために、In Design移行後に校正事項が多かった。In Designでの入力作業ができる職員数に限りがあり、このタイミングが早過ぎたことが課題となった。5、7についても共通するところがあるが、

初めて資料編を作った中で、本文以外の部分、口絵や表紙カバーの編集を、本文編集作業が一段落してから始めたために時間がかかってしまった。掲載許可に当初予想していた以上に時間がかかってしまったこともあり、今後は同時進行でスケジュールを組んで終わりを統一できる方法を取らなければいけないと思っている。「近現代1」については、そのような課題、改善策を考えている。

「資料編1 原始・古代」は前回報告したとおり発行時期がずれ込んでいるが、事務局を強化して今秋を目指して編集作業を進めている。先ほど紹介した増員のほか、6・7月に編集作業補助のために臨時職員も1名配置している。

「村明細帳集成」だが、これもIn Design原稿で当初から作成したために、修正作業ができる人数が限られてしまったところが課題として上がっている。

「恩方の民俗」に関しては、話者確認や写真の掲載許可について時間がかかったことが大きな反省点になっている。

「市史研究」2号も、共通の課題になるが、事務局側で原稿整理や校正作業にあたって、スケジュール、手順、あるいは校正ルールが定まらない中でスタートしてしまったための問題が発生している。

本は違えども共通した課題が出てきており、今回、事務局の課題、反省事項として、裏面に総括、共通事項をまとめた。入稿原稿整理を徹底させるということ。資料の筆耕要項、校訂・割付要項、原稿執筆要項などは早い段階で確定して、原稿作成段階から体裁・表記の統一を図る。それに基づいて事務局校正を複数の目でしっかり行うこと。スタート時点で執筆者全員がルールを共有できるようにしなければならないということが大きな反省点となっている。それから、凡例・巻末資料、口絵・表紙等の編集作業は早期に進める。複数人で分担・同時並行で作業ができる方法で入稿原稿を作成する。基本は、入稿段階まではワードで作成する。掲載許可や話者確認を要するものは、入稿前に了解をとれるようなスケジュールを組む。当初から十分な初校期間を確保する。作業の重複等による時間のロスが発生しないように、手順、役割分担を明確にしておく。こういったことが、事務局としての課題及び改善策として今回まとめた事項だ。以上である。

【藤田委員長】資料1は、4月1日以降の職員の異動、体制。それなりに充実させたということだ。これはこれでよいかと思うが。

(一同了解)

【藤田委員長】では、まだ途中経過のものもあるが、前年度刊行した刊行物5点について、個々の課題とその改善策と、ほぼ共通している課題と改善策についての説明があった。何か質問とか意見があれば。

【委員】資料編を全部は見っていないが、一つ気がつくところは、教育とか、事務所 恩方事務所などに残されている資料が、明治初期とか20年代を含めて中心になっているが、そのほかの資料の所在は何か当たったのか。冒頭のはしがきに、市全域にわたって、または全面的に各分野を検証していくのだと言っているが、実は恩方の文書は相当量が出たと。

恩方の文書を中心に資料の精査をして、資料編の項目の中に相当量入っているようだが、例えば、八王子の中心街についての資料については、一切触れていない。明治の大火、昭和20年の空襲等々によって焼失されたといういきさつにも触れていなくて、項目だけを見ると中心街に関わる資料が非常に少ないところが目立つ。当初、資料収集に当たったの方針はどういうことだったのか。

【委員】私が編集全体の責任者として担当したが、事務局が中心になって編さん室で確認できるものはやったと思う。ただ、中心部がどうしても不足しがちで、各村平均的に出すというわけにももちろんいかないので、近現代部会で時代ごとにチームを分けて、そのチームの中で必要な資料を各村の文書の中から選んで編集した。多少偏りが出る傾向があったことはやむを得ないかなと。私も、中心部の資料がこんな少ないのでは困ったなと思いながら編集した。資料編の近現代はもう1冊出すので、第2巻で可能ならば少し補充したい。個人の文書などについても、地域的な偏りも含めて見直しながらやってみたいと思う。

【委員】当初から恩方事務所の保有資料が非常に多くて、そちらに目がいったのではないかと思う。一つは、各学校に当たったかどうか。旧市内はないものかということでは当たらなかったのではないかと。明治10年代、20年代についての旧市内の小学校資料の項目については、何も出てこない。

【委員】学校関係の資料も、全然当たっていないわけではないが。

【委員】例えば、第二小学校120年記念誌の中で、当時の多賀小学校の設置許可申請書があるにもかかわらず、この資料に載っていない。由木中央小学校は生蘭小学校だ。そういう明治初期、10年代の資料がほとんど載っていない。恩方の文書に終始しているような感じがする。見る人が見ると、どうしてこれが載っていないのかということになってしまう。2冊目の資料編などで補完できればしていただきたい。

【委員】わかった。

【藤田委員長】今のは内容に関わる質問で、出版したものについて、一度どこかで内容自体を検証するというか、話をする場を設けた方がよいのではないか。要するに、編集委員会として出しっ放しではなくて、良かった点も含めて、そういうことを議論する場を設けた方がよいのではないかと思う。ここで事務局から出されているのは、内容ではなくて、刊行する過程で生じた問題、課題を挙げて、それを整理して改善策を出したということだ。

【委員】私が思うには、項目の検証をやった方がいいと思う。この資料編の中の参考図書、使った資料等を見ると、東京都公文書館、恩方事務所、鍵水町会共有文書の三者だ。ほかにもあると思う。例えば神奈川県事例、明治10年代、26年までの大半は藤沢の教育センターの図書館にあるが、行っていないのではないか。東京都公文書館には、少なくとも明治26年前後の文書しかない。市史編さんを10年間かけてやるという前提からすると、行ってしかるべきではないか。そういうところが抜けている。それから、織染学校、第四高女、第二商業学校についての資料も項目もないが、これも当たっていないのではないか。これは創立60周年に編さんした資料の中に、東京府広報に、大正9年だと思うが「府立第二商

業学校学則を定める」という公文書がある。細かいことだが当然やるべき作業だと思う。

【藤田委員長】編集、刊行過程での課題で、「近現代」は一応7点上がっている。直接担当して、特に問題だった点を参考までに話してもらえるとありがたいのだが。

【委員】先ほど事務局からの説明で、問題点は大体網羅されていると思う。一つは、編集の段階で部会がチェックしたものをもう一度事務局がチェックするという中で、事務局が最終的に用語の統一とか、凡例に基づいているとか、そういうことまで含めてチェックしたと思うのだが、ここが部会との間に多少齟齬があって、僕らはもっと早く次が出てくるかなと思ったら、いや、まだ事務局で確認しているというようなことがあって、最終的に刊行日が少しずれてしまった。専門部会委員がチェックしたものにプラスして、事務局がどこまでチェックするのか、十分なコミュニケーションがなかったかなど。今後次々と資料集を刊行するので、少し考えておかねばいけないかなというのが一つ。

もう一つ、In Designは我々がどうしても慣れなくて、従来の編集のやり方で進むと思ってしまう。校正ゲラが出て、赤を入れて戻してというこれまでのやり方に我々は慣れているので、ついそういう形でやってしまうのだが、In Designになった後はもう専門的な人が見て直さないと修正できないという状況で。それで事務局にいる専門の方がやってくれることになったが、当然時間がかかってしまう。この方式がずっと続くのかどうかかわらないが、In Designでやるということの不慣れさがあったかなど。

それから、掲載許可がやはりどうしても時間がかかってしまう。写真1枚使うにしても、資料を使うにしても、掲載許可を同時並行で当然やらしてもらったが、最終的にはまだこの資料の本当に所蔵者がわからないとか、あるいは連絡がとれないということで、刊行を少し遅らせてしまった原因にもなったかなど。掲載すると決まった資料、写真、図版については、許可が必要なものは、最初の段階からやっておく必要があったかなど。それと、最初の筆耕の段階で我々も共通認識がなかったかと思うが、第1巻目をやったので、次からは大丈夫だと思うが、こういうものはこういう字を使うとか、これは略すとかという、そういうものが共有できるのが遅くなってしまった。ともかく筆耕することが先行したので、そのズレが出てきてしまった感じがする。

【藤田委員長】原稿を作る上での要項を、それに関わる人間がきちんと共有していないと、結局ばらばらになってしまって、最後に不統一が目立つことになる。ただ、確かに要項や凡例を決めておいても、それにどうしても合わないのが出てくる、実際の資料というのは。そうすると、それを担当者本人が適宜判断して、凡例に合わなくてもやってしまうということはある。やむを得ないことだとは思いますが、特に統一した要項・凡例をきちんと作っておくということだ。これは全体を通して作れるものもあるし、やはり時代ごとに少しずつ違うので、独自のものを作っておくことが必要だと思う。

もう一つ出ているIn Design、これが私はよくわからない。近世部会では、原稿は基本的にはワードで作る。それで、事務局にはワードで打ち込んだデータと、それをプリントしたものに赤を入れて割付した原稿を渡すということで進めている。これを事務局でIn

Designにするのか。

【木内室長】実は23年4月にIn Designを駆使できる編集経験豊富な任期付職員を1人採用した。In Designで入稿できれば後の作業が楽になるだろうということで、In Design自体にどこまで時間がかかるか経験がなかった中で、23年度に関してはそういう仕様書で契約も結び、結果として契約額が当初想定していたよりも落ちて差額が出たということがあった。しかし結局、そのIn Designを使える端末が1台しかないことと、作業できる人間が1人しかないということで、原稿が溜まってくると時間もかかるし、担当者にもプレッシャーがかかってしまうという課題も明らかになった。それで方針を変えた。印刷業者に作業をしてもらう方が、結果として出来上がりも早くなるし、いろいろな調整もしやすいのではないかとということで、今年度は近世の資料編刊行ということで、ワードでの入稿を前提とした仕様にする前提で進めている。「恩方の民俗」は最初からワード入稿でやり、内部努力でも何とかするという目途がたった。「原始・古代」はIn Design入稿にしてしまったことで、完全原稿を出すという前提でしか印刷業者も対応しないということで、なかなか入稿できない状況になった。それで完全に考え方を変えよう。但しそうはいつてもIn Designのメリットもある。「八王子市史研究」のように、ある程度体裁も雛型も決まっていて作業も進められるというものは、最初からIn Designで入稿原稿を作って印刷代を極力抑えて廉価に販売をするということで、一応、内部的には整理した。In Designが使える端末も、それが操作できる人間も増やして体制も整えた。

【藤田委員長】23年度の刊行物と24年度以降の刊行物では、その編集手順を少し変更した。近世は、私たちはとにかくワードで作成して、それをプリントして、そのプリントしたものに赤を入れて割付する。それを事務局に渡すというやり方でやっていて、今後は基本的にそういう方向でやるということか。

【木内室長】原則そのやり方にしたい。

【藤田委員長】ただ、「市史研究」のような性格のものについては、In Designで基本的にもうそのまま刷ればいいという形まで持って行って、印刷屋に渡すということか。

【委員】In Designというのは編集ソフトだ。例えば、郷土資料館などではもう数年も前から入れていて、それで編集してしまう。資料館の仕事は市史編さんのように複雑ではないので、できるだけ販売原価を廉価にしよう。ひところ印刷屋とのやりとりで校正とか何かをすべてやっていたときは1冊1,000円以下というのはあり得なかったのだが、今は500円とか400円だ。多分行政としては魅力があるのだろうと思うが、やはりIn Designは能力の限界がある。編集ソフトだから、原稿を後で直そうというのは結構大変なのではないか。技術が要るし、編集担当に聞くとワードとドッキングしていないそうだ。例えばルビをつけるときは非常に困っていると。In Designでは一太郎のようなわけには全然いかない。普通にやって変換すると一度に変換できるのが、4分の1の活字になってしまう。小さ過ぎて我々にとっては非常に不満で、それを避けようとして、全く別なワードの打ち方をしてIn Design編集に回すと。それですごく時間がかかった。市史編さん作業にはちょっと無理だ

ったかなと思う。

【委員】資料集は本来はIn Designに向かない。向かないけれども、やらざるを得ないので、それはもう極力事務局でやると。普通の文章を書く場合には、ワードでやればできるが、資料編とか資料集というのはワンパターンではないからIn Designでは合わない。

【藤田委員長】それを今年度からは変更したということで、それで進めていただきたい。

あと、特に資料編だとかなり膨大な所蔵者、所蔵機関と関わらざるを得ないということで、掲載許可は相当の事務量だったのではないかと思う。

【委員】掲載許可は、今、事務量の6割だ。

【藤田委員長】なかなか資料が確定しないこともあって、こちらが悪いところもあるのかもしれないが…。

【木内室長】事務局も、所蔵者に所蔵文書の掲載の了解をとることにこれほど時間がかかることを想定できなかったという見込みの甘さもあった。了解をとるには、例えば、どういう状態でどういう本になるのかが見えないと、可否の回答をしにくいのではないかということもあって、初校ゲラを見せて説明すればよいのではないかと。特に、民俗部会ではそういう発想もあり、初校ゲラが出てきた段階で実際には動き始めた。そうすると、例えば、話者確認をしたときに、ここは直してほしいという希望が出てきたりして、時間がかかって二校に進めないということが出てきてしまった。少なくとも掲載が決まれば、入稿前にそういう作業を終わらせるという前提で考えなければいけないのかなと。今年度からはそういう方向でスケジュールづくりなどもし始めた。

【委員】それから、「八王子市史研究」で、内容ではなくてこの背文字のズレ。これは断ち落としがまずいのではないかと思う。1冊ならいいが、これが10冊ぐらい並んだときに波を打ってしまったら、それだけでもうこの価値は余りない。これは非常に重要だ。文庫本を見ればわかる。全部統一している。そういったところも配慮して。

【木内室長】仕様書は変えていないが、前年と業者が変わって…。

【委員】競争入札だから、やむを得ない。

【木内室長】随契で全巻同じ業者にとということが今の状況の中でできない。今後は、仕様書が同じであれば、そんなにばらつきが出ることはない形になるかなと思っている。

【藤田委員長】その点で言えば、市史の本編全体も、並べてみたときに上がったたり下がったりしているということのないように細心の注意を。事務局でそこは厳密に、必ずお願いしたい。原始・古代で何かあれば。

【委員】現在、最終の入稿原稿整理中なので、変更後の刊行日は大丈夫だろうと思っている。前の轍を踏まないように、本編の方は既に同時進行で動き始めている。遅れの最大の原因は、やはり本務との関わりで原稿がなかなか出なかった方々がいたということがまず一つ。あと、考古学は時代別で縄文、弥生、その境目がよくわからないことと、各考古学者が一人一人時代区分をもっている。それを果たして市史に出していいかどうか、そういう基本的な問題も執筆段階で上がってきたということもある。その点についても、本編で

は資料編のような迷惑をかけることはないと思う。

【藤田委員長】刊行日云々は、後で説明があるのか。

【木内室長】予定はまた後で話すが、前回の編集委員会で6月末頃までにと説明したが、今は年内の発売開始ができるようにということで進めている。大分遅くなるが、とにかく年度内ではなく年内ということで、鋭意やっている。

【藤田委員長】では、前年度の編集・刊行過程で出された課題とか問題点等についての議論はこれで打ち切る。それでは、資料3以降のことについて、事務局から説明を。

【齋藤主幹】資料3は、刊行物の販売状況等についての説明だ。トップの横向きの表を見てほしい。刊行物の販売状況を示している。市政資料室から、南口総合事務所、郷土資料館、編さん室、編さん室（郵送分）のところまでが、常時刊行物を販売している場所だ。恩方事務所は、通常は刊行物の販売は引き受けていないが、「恩方の民俗」について特に私どもから依頼して販売してもらっている。その横の「いちょう塾」、「市長と語る」の二つについては、出張販売実績だ。『新八王子市史』資料編の「近現代1」は、1,500部印刷して、6月末日時点までで82冊売れている。売れ行きとしては順調で、この後説明するが、パブリシティの効果も出ているのかなと思っている。

次ページに、こういう形で販売して郵送等についてはこういう金額でという事務的な説明をつけている。その次のページに無償配布先の一覧を添付した。その裏面からがパブリシティ関係だ。ここで刊行が続いているので積極的に新聞記者等に情報を流していて、4月以降は比較的扱ってもらっている。大きな記事にしてもらえたかなと思う。「近現代」については、八王子テレメディアでも扱われている。次の「市史編さん 刊行物のご案内」と書いてある両面のものがチラシで、事務所や市民センター、図書館で、あるいは出張販売やイベントの際に配布している。販売状況と宣伝の状況は、以上である。

【藤田委員長】販売状況を見ながら刊行部数とか印刷部数などを考えることになるのだと思うが、今の販売状況を見て、印刷部数についての判断は。

【木内室長】現時点では、部数が多過ぎたとか少な過ぎたという判断はしていない。やはり扱う時代による違いとか、まだ事務局では予測できない部分もある。例えば、1年を通じてどのくらい売れるのかとか、新しい号が出たときに過去のものがどのくらい売れるのかとか、その都度慎重に見極めていきたと思っている。

【委員】資料編「近現代」の第1巻目が出たばかりだが、全巻出た段階で、恐らく前のものも含めて購入しようという方もいるので、今の段階でもう500部ぐらいしかないというのは、ちょっと不安な感じもする。長期の戦略を立てておいた方がいいかなと。この時点でもう544部しか残部がないわけで、これからまた次々と資料編が出て、本編も出てくるといふ段階になってきたときに、やはり資料編もそろえようという方や、新しく八王子に移ってくる方も当然いるだろう。そう考えると、ちょっと心配な数かなという気はする。

【藤田委員長】残ると大変だということもある。1,000ページで3,000円というのは、信じられない安さだ。

【委員】安過ぎる。

【藤田委員長】経費を減らすという意味もあってIn Designでやった。今後はそうではない方法でやると高くなるということはないのか。

【木内室長】前にも編集委員会の中で考え方を示し、経営会議でも理事者の了解は得ているが、基本構想にも求めやすい金額で頒布するという方針を掲げている。「原始・古代」と「自然編」はオールカラーで大判になるので1冊5,000円と想定しているが、少なくとも資料編に関しては、今後ほかの時代に関しても3,000円で統一をしたいと思っている。他自治体の例を見ると、原価で割り返して巻ごとに価格が違っているものもあるが、市民にとっても事務的なところでも余りメリットがない。編さん事業そのものを市民に還元するという意味でも、実際に現物を手にとって見て活用してもらうことを優先したい。理事者にもそのように説明して、そういう価格設定で了解を得ている。

【委員】年1回、立川でブックフェアをやる。あそこへ持っていくと、こういうものの売れ行きがわかるのではないか。新しく出たものをどの程度皆さんが買っていくかということで、先々の流れが多少あそこでわかる。特に、「恩方の民俗」とか「村明細帳集成」のような巻の出方というのは、立川のフェアで反映されると思う。

【事務局】1月に立川の郷土史フェアで郷土資料館に代理で販売してもらった。「八王子市史研究」が20冊ほど売れたと聞いている。

【藤田委員長】次に、資料4、市史編集専門部会調査活動報告。

【齋藤主幹】前回の編集委員会以降の各部会の調査活動報告書について、資料を添付した。

【藤田委員長】各部会でこの間の活動についての簡単な報告が出されている。特に何かあれば、各部会ごとにお願いたい。

【委員】近現代部会は、聞き取り調査が少し遅れている。近現代はやはりインタビューをしなければならない。主要な方が何人かいるので、今後やっていきたいなと思っている。

【藤田委員長】自然部会は何か特にあるか。

【木内室長】事務局から少し説明を。自然部会は来年度が「自然編」の刊行で、今年度と2年間での債務負担行為予算で、契約は今年度中に締結する。9月末までに原稿を書き終えるということで、4月に執筆者全員によるキックオフミーティングとして全体会議をやった。現在は、執筆中という状況で、原稿が出てくるまでは部会会議の予定はない。9月に原稿が出そろった後、半年近くかけて全体調整、編集作業をして、年度内には入稿、来年度には刊行、という前提で進めている。

【藤田委員長】民俗は何かあるか。

【木内室長】「恩方の民俗」が出来上がったので、毎年出す民俗調査報告書ということでは、基本的に流れが部会で共有できている。今年度は「由木の民俗」を出す。現在、8月の原稿締切を目指して、鋭意聞き取り調査等を行っている。また、今年度は民俗部会で1冊、八王子の織物についての聞き書き中心の叢書を出す。部会会議とは別に編集チームをつくらせて打ち合わせを重ねている段階で、年度内に出す方向で進めている。

3. 平成24年度刊行予定について

【藤田委員長】では、議題の2、平成24年度の刊行予定について、事務局から説明を。

【齋藤主幹】24年度に編集が始まって25年度に関わってくる部分もあるので、予定を含め25年度分まで載せている。まずは資料編1の「原始・古代」について。秋に向けて順次編集を進めて、入稿前の最終段階まで来ている。「近世」についても順次、表のような工程で進めていく。「民俗」は、2冊目の調査報告集「由木の民俗」を今年度末を目指して、現在、原稿執筆、取材が続いている状況。市史叢書2として「八王子織物」、まだ仮称だが、今年度発行に向け、現在、聞き書き等を進めている。「八王子市史研究」3号は、既に各部会に執筆をお願いして、執筆をしてもらっている状況だ。

太線より下段は25年度刊行予定のもので、先ほど説明したとおり、「自然編」は債務負担で2か年にまたがる契約ということで、各専門分野の方に執筆をお願いしている。「中世」は、現在、資料選択、筆耕等を順次進めている。「近現代」の2は、資料選択等を進めている。「由木の民俗」の次は浅川になるので、浅川の聞き取り調査に「由木の民俗」の編集とかぶる形で入っていく予定になっている。それと、先ほど編集過程での反省事項を話したが、今年度、私が異動してきた直後に、四つの印刷物すべてが納品をされて、無償配布をする、販売の手だてをして販売のルートを載せる、広報紙に載せる、宣伝をするということが同時進行で続いた。今年度末の3、4月も同様になる。この編集後の実務も結構質、量ともにある。この部分については、今年度の経験を踏まえて、不備が無いようにいろいろ方法を考えたいと思っている。資料5については、以上である。

【藤田委員長】こういうスケジュールで順調に進むように、各部会も事務局も努力することだと思う。では、資料6、資料編の章立て・目次案、これも説明をお願いします。

【齋藤主幹】資料6は、『新八王子市史』資料編について、「原始・古代」と「近世」の目次・章立て案を資料として配付した。

「原始・古代」については、まだ微調整は入るかもしれないが、かなり確定版に近い形でこのような章立てで進んでいくというものを示した。「近世」はまだ作業途中で、今後詳細を詰めていくので、まだ変更部分は出てこようかと思うが、今現在での章立て・目次案について示した。以上である。

【藤田委員長】「原始・古代」については、もう刊行が迫っている段階で、ほぼ確定している章立てだ。「近世」は私が担当だが、章・節・項の名称は結構移動するのではないかと。今はとにかく個々の掲載資料を整理し固めることに集中している。特に節とか項の名称は、もう少しその資料にふさわしい名称を考えなければならなくなると思っているので、これがこのままになるとはとても考えられない。でも、大体こういったような内容だという趣旨で見ていただくと、ありがたい。

では、資料7の市史研究の3号について。

【齋藤主幹】市史研究は、創刊号、2号は特集を組む形でやってきたが、刊行物の刊行が

いよいよ本格化してくるので、第3号は特集を組む形ではなくて、調査活動中に発掘された資料等についていち早く市民にお知らせしたいとか、貴重な資料だが本編等では扱いつらいといったものを市史研究の中で紹介していこうということで、各部会にお願いした。資料7の割付表のとおり各部会に執筆者を決めてもらった。投稿原稿は、車人形等を含めて人形浄瑠璃というような内容で書きたいということで1名の投稿申し込みが出ている。刊行物紹介も、欄を設けさせていただくので、よろしく願います。市史研究3号は、この形で進めたい。報告は以上である。

【藤田委員長】編集会議を開いて大体まとめたことだ。第1号、第2号はともに特集を組み、特に第2号は、たまたま大正100年という節目があったので、それで組んだ。第3号は考えてもちょうどうまい話も出なかったの、特集はやめて個々の部会で一つずつお願いをすることにした。今までにないものとしては、この間、刊行物が4点あったので、これを紹介する。ここが新しいところだ。投稿原稿だが、第1号のときはかなりたくさん集まった。第2号は少なかった。第3号に当たっては、ゼロだと困るなと思っていたが、1人申し込みがあってよかった。それが現状ということだ。まだ原稿が来ているわけではないから結果はわからないが、1人だけでそれが載ればいいが、それにしても最大で1ということだと16ページ分が空くことなる。これについてはどういう方針でいくのか。

【木内室長】投稿原稿1本であっても、本の体裁としては十分いけると思っている。投稿原稿をただ待っているということではなく、我々の側から、育てるといって語弊があるかもしれないが、投稿者を探し出す作業もしていかなければいけないのかなと思う反面、どうしても無理に2本必ずそろえるということではなく、やはり市史研究にふさわしいものということで、その点、この本数については、ある程度フレキシブルな考え方をしても、本の体裁として、ページ数としては大丈夫と考えている。

【藤田委員長】投稿原稿分がなくても、3号としてはこれで出すということだと。ただ、もう少し働きかけをしたいと。第2号は、載せたのは確か1本だけだった。

【木内室長】掲載したのは1本だ。

【藤田委員長】ああいう形のものがあればいい。何か働きかけをやるのか、3号に関して。

【木内室長】前回は投稿論文として掲載したのは1本だが、実は投稿を募ったときに研究協力員や専門調査員から投稿したいという申し出があったので、編集会議でそれは一般投稿扱いせずに各部門からという形で出した経緯がある。今回、特に当初、編集会議の中では予定していなかった部会から資料紹介を出したいという申し出もあり、資料紹介とか調査報告が増えたので、3号に関しては、申し込みの締め切りが7月末ということもあり、ここで無理してでも投稿を働きかけることはあえては考えていない。

【藤田委員長】投稿原稿については、そういう方向でやるということだ。何かあるか。

(なし)

4. 市政モニターへ設問項目について。

【藤田委員長】議題の3に移る。市政モニターへの設問項目について。

【齋藤主幹】市政モニターについては、前回の編集委員会でも報告したので、今度はより具体的な部分で、こういう方向で設問設定したいという部分について意見を聞きたい。

まず、その前提となるスケジュールだが、8月下旬までに設問を決定する。9月中旬に市政モニターアンケートを実施し、10月下旬ぐらいには結果が確定する。担当所管の市史編さん室には、結果が確定した時期に生データの形で内容をもろうことはできる。11月下旬に整理後、市民に結果が公表されるというスケジュールだ。

今回の設問の基本的な考え方だが、まずは市史編さん事業の周知度、歴史・民俗・自然への関心、『新八王子市史』への期待・提案、市史編さん事業とまちづくりの関係、刊行物販売促進のための私どもの参考となるような項目、それから資史料の保存と活用への意見、その他自由な意見というようなことで設定している。

設問項目（案）だが、まずは市史編さん事業の周知度ということで、「市制100周年を迎えることを知っていますか」、「市史編さん事業を進めていることを知っていますか」、「市史編さん事業の一環として実施している講座や活動に参加したことがありますか」、「『稲荷山通信』を読んだことがありますか」、このような問を設定している。

（2）歴史・民俗・自然への関心、『新八王子市史』への期待・提案では、「八王子の歴史に関心がありますか」、「ある」としたら、「どういった時代、ジャンルでしょうか」、それから、「これまでに発行されました旧「八王子市史」、「市議会史」、「千人同心史」、「戦災と空襲の記録」をそれぞれ知っていますか、あるいは読んだことがありますか」、「『新八王子市史』で取り上げてほしいこと、あるいは史料等があれば、自由にお書きください」という問を設定している。

（3）市史編さん事業とまちづくりの関係では、「まちづくりについて、あなたの考えに一番近いものをお選びください」ということで、「自然・歴史・文化をよく理解し、伝統を生かしたまちづくりを進めることで、八王子の魅力をアピールできる。」、「地域コミュニティ育成のためには、地域の歴史・文化を知り、共有することが大切である。」、「まちづくりの市民参加を進めるためには、市民が地域のことを知り、学ぶことができることが大切である。」という設問、4番は、まちづくりについて自由記載欄を設けた。

それから、刊行物販売促進のための参考項目だが、「購入する意思はありますか」ということで、購入したい、購入しない、わからないという設定。それから、「金額について幾らぐらいまでなら購入をされますか」ということ、「販売場所についてどういったところを望みますか」、「今現在、既に市史編さんで発行している刊行物を持っていますか」という問を設定した。

史資料の保存と活用については、「編さん事業終了後の保存・活用について、市では、専門施設の整備も視野に入れながら、その保存・活用について検討していますが、皆様方、それに対してどういったご意見をお持ちか、お聞かせください。」最後に、「何でもご自

由にお書きください」という問を設定している。

設問決定が8月下旬なので、ここで意見をもらうとともに、気づいたこと等があれば、個別にでも結構なので事務局に話してもらえれば、設問項目を今後も考慮していきたいと思っている。以上だ。

【藤田委員長】簡単に市政モニター制度について説明してほしい。

【齋藤主幹】市政モニター自体は、公募で既に決定している。100名だ。この100名の方に、年3回、6月、9月、12月に、市から、例えば今回でいうと、市史編さんというような大きな括りでのテーマを二つから三つぐらい、その中に10問ぐらいの問がそれぞれ設定されて、基本的にはインターネットで回答をしてもらう形だ。市が今、市民の気持ち、感覚がどういうところにあるのかというようなところを設問して、回答してもらったものを今後の市政運営に生かしていくというものだ。制度の説明は、簡単だが以上だ。

【委員】これは無記名か。

【齋藤主幹】基本は無記名だ。

【委員】例えば、年齢階層とか職業階層は、統計的に分析した場合にわかるのか。

【木内室長】これは広聴担当でやっていて、市の方から聞くというものでは、市政世論調査と市政モニター制度の二つがある。世論調査は無作為抽出で、3,000人を対象に、回答率が60%程度で、郵送による調査を行っている。バランスを考慮して無作為抽出しても、実際の回答者はかなり高齢者層に偏るところがある。市政モニターアンケートに関しては、公募でモニターになりたいと手を挙げた方について、1,000字程度のレポートを出してもらって100名を超えたときには100名に絞って、その方々をお願いするもの。もともと市政に関心が深い、広報なども読んでいる方々で、なおかつほぼ100%に近い形の回答率になる。やはりインターネットでのやりとりができる 在宅のまま市政に参加できるということで、割と若い層の方も多い。今回のモニターの年齢構成は手元に資料を持っていないが、新たに転入してきて子育てをするようになって、初めて行政や地域に関心を持ったので、ぜひ何か市政の役に立ちたいという30代の主婦層の方なども結構多い。私が前に選考委員になったとき、そういう人が多く意外に感じた。そういう意味では、年齢層も幅広く、日ごろ会社勤めや子育てでとても市政参加できない方もモニターの中にはいるという状況がある。

【藤田委員長】そういう方を対象にしたアンケートをとるという上で、こういう設問項目の立て方について、こうしたほうが良いというようなことがあれば、出してほしい。要するに、こういうのは答えやすさが一番だ。アンケートを受ける側に身を置くと、やはり答えやすいのが一番いい、そうなっているかどうかという点で、どうか。

【委員】量としてはこのぐらいが適切だ。余り多いと、見ただけで嫌になるので。

【委員】市史編さんの終了後まで聞いていて、かなり幅広い項目ではないか。

【委員】今、終了後までということがあったが、取り入れられる時期というのは限られている。でも私は、こういうものをするのは非常にいいことだと思うし、やはり市史編さんというのは、今回やったら、もう次は我々が生きている間はないので、そういう意味で

は、市民に市の歴史について大いに興味を持ってもらって、八王子市の今後の発展のために市民が一体となってもらうのが一番大事だから、なかなか大変だがやることはいいことだと思う。編集委員会、審議会にこのアンケートの結果を教えてほしい。できることとできないことはもちろんあるが、私たちの方へ提供してもらうことも大事なことだと思う。

【委員】10月下旬に結果がわかれば、編集委員会なりに出してもらおうとよいのでは。

【藤田委員長】市民に公表するということが、もう少し細かな分析とか何かもあれば、伝えてほしいが。

【委員】いろいろ出てくるだろう。

【委員】自由欄があるから、結構書く欄が。

【木内室長】これまでに実施されたものもホームページで公表している。それを見る限りでも、やはり先ほど言ったような方々がモニターになっているので、自由記述がかなりいっぱいある。それは出たままを公表している。編集委員会や審議会に提供するときには、どんな意見の傾向なのかとか、少しその辺は、ある程度整理をして、こちら側がどう受けとめるかということも含めて報告をしたい。

【委員】疑問な点も少しあるのだが、市政モニターは市政全般のモニターか。

【木内室長】そうだ。

【委員】今回のこのアンケートは市史という限られた分野になるわけで、どのぐらいの歩どまりというか、何人ぐらいが応募されると思うか。

【木内室長】モニターは、市からのそういうアンケートに答えることを前提にして募って了解をしているので、回答率自体はかなり高いと思う。統計学的な意味での厳密性はないかもしれないが、市に対して積極的に意見を言う方が、特に自由記述ではかなり自由に意見を書くので、こちらで想定していないような意見が出てくることもあるかもしれない。

【委員】勉強不足でアンケートそのものを見ていなかったもので、市政モニター自体、余りよく知らなかったのだが、どういう内容で市はアンケートをとっているのか。

【木内室長】例えば、直近の例では、市の広報の紙面が今年度から大きく変わったが、そういうことをする前の段階で、広報担当が市の広報についてどう思うかというアンケートをやっている。所管課も今は財政難で、独自に意向調査をする予算がとれないので、市政世論調査の中で自分の所管の施策展開に必要な項目を設定したり、このモニターアンケートを活用したりということで、科学的な客観性という中では難しい面があるが、市政に関心のある市民がその課題についてどういう意見を持っているのかということは、大いに参考になっている。ごみの減量のことなどもやっている。

【委員】インターネットで回答だとすると、やはり年齢層が、多分、高齢者は答えにくいと思うが。

【藤田委員長】それを使えることが前提で応募して、委嘱しているということで。

【委員】私が気にしているのは、多分、もう八王子は56万か、その人口の何十%、もう旧市民は余りいないのではないかと。旧市民というのはどこまでかと言われると、ちょっと

困るのだが。そうなると、年齢層も限られる、新市民が圧倒的になると、こういう言い方はいけないが、非常にバランスの悪い、八王子市史に対する期待度というか、それも一つの市民の意見なので貴重なものだとは思いますが、どうなのか。

【木内室長】我々もいろいろな層に声を聞く機会を大事にしたいと思っている。例えば、既に登壇された委員もいるが、「いちよう塾」で市史編さん室提供講座をやると、受講者アンケートも当然やる。受講者はそもそも歴史に興味があり、昔から自分も歴史の勉強をしているという方が多いので、やはりいろいろ参考になることを書いてもらえるが、どうしてもそういうことに特に関心の深い人の意見が中心になってしまう。むしろ我々が特に意識して集めなければいけないのは、日ごろそういうことに余り関心を払っていない方だ。我々としては一生懸命広報しているつもりだが、どこまで伝わっているのかとか、あるいは日常の中でそういうものに触れたときに、どういう反応をされるのかとか、一つのいい機会にはなと思う。これですべて市民の意向を把握するという意味でやるのではない。

【委員】わかった。そのとおりだ。よろしく願います。

5. その他

【齋藤主幹】資料9、その他、報告事項だ。

まず、1番目。「広報はちおうじ」8月1日号で市史編さんの特集記事を掲載する。現在、広報紙面はすべてカラーになっており、表紙から1、2、3面のところまでが市史の特集になる。もう既に取材等に協力いただいている。これで市史編さん事業について、広く市民に周知したい。

次に、市史編さん職員研修の開催。これも市史編さんが始まってから継続的に事業を実施しており、市民はもとより、職員にも市史編さん事業の進捗度合いやその意義について、しっかり伝えていきたいと考えている。毎年年度末になりがちだったので、今年は早目に8月9日に設定した。ここで資料編が出たということもあり、それから、「八王子市史研究」2号の特集とも絡めて「大正時代の八王子」ということで近現代部会の梅田定宏委員に講師をお願いした。ちょうど大正時代の八王子、「大八王子構想」といったところと現在の中核市を目指そうとしているところ、似たような状況もあるので、貴重な機会になると思う。

それから、刊行物アンケートはがきを作成した。本日の資料の一番後ろに添付をした。これから発行する刊行物にはそのはがきを挟み込み、市民の意見を聞いて、今後の事業に反映をさせていきたいと思っている。あわせて、先ほど見てもらった新聞記事の一番後ろについていたチラシも三つ折りにして、今後の市史刊行物には挟み込んで、刊行物の宣伝をしてゆく。

4番、調査等協力者に対するお礼の品ということで、ミニ手ぬぐいとしおりをそれぞれ100ずつ作成した。これらの品は、障害者団体に作成してもらった。八王子は「障害者とともに生きるまち」を宣言している。「市史編さんにご協力いただき、ありがとうございます」という紙と、「福祉のまちづくり」という紙を2種類入れてある。今後、ぜひ活用してほ

しい。

続いて、市民講座の開催。今年度も学習支援課と協力して、生涯学習センターホールで市民講座を開催する。今年度は原始・古代部会の担当で、表のとおり全4回講座として開催する。原始・古代資料編の刊行時期に合わせて、この折にも出張販売をしたいと思う。

それから、「いちょう塾」への講座提供。これも部会の協力を得て、今年の秋にも開催する。今回は「八王子の生き物栄枯盛衰」を自然部会の須田孫七委員に、「古事記1300年を活かし、神話のふるさと出雲へ」を原始・古代部会の関部会長に、講師をお願いしている。

報告事項は以上である。

【藤田委員長】刊行物のアンケートはがきを販売する本に入れるわけか。

【齋藤主幹】はい。

【藤田委員長】それと、先ほどのチラシを折り込みで一緒に入れる。そういう形での宣伝と、読者の意見を求めるということをやりたいということだ。普通、よその自治体史でもよくこういうものを折り込んでいるようだが、八王子市もそれにならって折り込むということだ。あとは、市民講座と「いちょう塾」。それからお礼の品について、どうか。

【委員】助かる。今まで何度もたくさんの方に調査協力していただいても、『稲荷山通信』ぐらいしか渡すものがなくて、何となく申し訳ないような気がして。時間を随分とっていただいたりするので、ありがたい。

【委員】やはり市史についてちょっと触れているのがいい。市史を身近に感じてもらえればいいなと。

【藤田委員長】全くどこへも手ぶらで行っていて、何となく気恥ずかしいというか、常識がないのではないかと思っていた。やっと八王子市市史編さん室も世間並みになったなと思う。これを活用いただくということで。

今日の議題はこれで終わる。何か全体を通して話しておきたいことがあれば。

(なし)

【藤田委員長】事務局からは何かあるか。

【木内室長】先ほど委員長からも話があったが、出版した刊行物の内容のこととか、あるいは折り返し点というか、事業期間も後半になり、これまでどちらかという資料収集とか調査が中心だったが、本を執筆する、編集することに時間的にも多くとられる状況になりつつある。その辺に踏み込んだ議論というか、今後の考え方を編集委員会としてもやっていただく必要があらうかと思っている。そんなに遠くない時期に、また次の編集委員会をやらせていただきたい。場合によっては、その前の段階で各部会とは今後の刊行物をどうするのかというような相談もさせていただくことになるかと思う。一応、前もってご了解いただければと思っている。

【藤田委員長】刊行物は、刊行してしまえばこれで終わりということではなくて、やはり評価すべき点と課題として残されてしまったというような点を、少なくとも編集委員会としては共有しておかないとまずいのではないか。刊行したものについては、外部からもこ

んな意見があるとか、そういうことも含めて議論する場を持ちたいと私は思う。編集委員会のときに、例えば、30分ぐらいは率直な意見交換を、ぜひ次あたりからの編集委員会でそういう時間をとっていただきたいと思います。

6 . 閉会

【藤田委員長】今年度第1回目の編集委員会をこれで終わりとする。お疲れさまでした。

平成24年8月30日

会議録署名人 新井勝紘